

町医者だより

令和07年11月号

動物に対するアレルギー

ネコやイヌを飼っている家庭が多いと思います。世界22か国における統計が発表されていますがイヌを飼っている方が33%、ネコ23%、魚12%、鳥6%、その他6%、ペットを飼っていない方が43%となっています。一般的にはネコに対するアレルギーがイヌよりも多いと言われていますが、論文によってはイヌの方が多いとするものもあり判断に迷うと所です。食物アレルギーをはじめ、アレルギーを起こす物質（抗原）の構成要因、コンポーネントを用いたアレルギー検査が行われるようになってきています（英語では component-resolved diagnostics CRDと呼ばれています）。今回はJ Allergy Clin Immunol誌の2021年の総説を参考にしたペットに対するアレルギーの話です。

動物の1番重要な空中抗原（空気中に浮遊する）はリポカリンと言うタンパク質で分泌腺で作られて皮膚、尿、汗、皮脂に存在します。それぞれの動物に少なくとも1つのリポカリン抗原が存在します。ネコではFel d 4とFel d 7が知られていて、これらの主要産生部位は唾液で毛づくろいを介して毛に付着します。Fel d 4は去勢された雌ネコの方が去勢されていないネコに比べて著しく高いようです。Fel d 4、Fel d 7に対する特異的IgE抗体はネコアレルギーの方でそれぞれ63%、38%認められ、Fel d 7はイヌのリポカリンのCan f 1とアミノ酸配列で62%の相同性があります。ネコかイヌのどちらかしか飼っていないても両方にアレルギー反応が見られことは不思議ではありません。イヌにおいてリポカリン（Can f 1, f 2, f 4, f 6）が最も多く分布するのも唾液で、中でもCan f 4の濃度が最も高く、イヌアレルギー患者の46%にCan f 4への感作を認めます。別の研究ではイヌアレルギー患者での各リポカリンへの特異的抗体保有率は、Can f 1（50～90%）、Can f 2（20～33%）、Can f 4（35～46%）、Can f 6（56%）となっています。モルモットではCav p 1、p 2、p 3、p 6が、ハムスターではMes a 1が、ウサギではOry c 1、c 4がリポカリンとして知られています。

他に重要な抗原としてセクレトグロブリンがあります。哺乳類では、ネコのFel d 1とウサギのOry c 3があります。Fel d 1は主に皮脂腺と唾液腺で作られてやはり毛づくろいで毛に移行します。Fel d 1はネコアレルギーの最も重要な抗原でネコアレルギーの方の90%近くがこの蛋白に感作されていて、ネコのフケに感作されている方の90%はこのFel d 1に対するアレルギーを有していると考えられています。血清アルブミンは抗原としてはあまり大きな役割を示していませんが、種を超えた相同性が高いため飼っていない動物に対するアレルギー反応を誘発する可能性があります。オスのイヌの前立腺から分泌されるCan f 5はカリクレイン蛋白に属していてメスは大丈夫でもオスだけにイヌアレルギーが出現する可能性があります。また馬の汗とネコの唾液に分泌されるラセリンも抗原となります。唾液や皮脂から分泌されるこれらの空中抗原が家具や衣類、あるいは床や絨毯に残り、乾燥で舞い上がったり、再度浮遊してそこに動物がいなくても抗原感作されてネコやイヌに対するアレルギーが成立する可能性があります。これまで、ペットアレルギーは動物の毛ではなく、フケに対してですと患者さんに説明していましたが、毛も大事で、多くは唾液に含まれる抗原に対してであることが分かりました。

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポー本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポー改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科